

# 思ひ草

第24号

平成29(2017)年11月29日 発行

## 学生のための共育フェスティバル

人間開発学部副学部長 やまだ よしひろ 山田 佳弘



先月29日10時、台風の関東接近による悪天候の中、本年度の共育フェスティバルが無事に開催されました。開場時刻前より多くの親子が列を作り、プログラム表に目を向けてどこの会場に行こうかと検討されている様子があちこちに見受けられました。来場者を待ち受ける学生たちも各会場でたくさんの笑顔を見られて安堵したと思います。学部開設時より毎年開催されている当企画は、学部学生に学内での各授業で学んだ知識や技術を実践の場において確認する貴重な機会となっています。さらには、来場者と触れあうことによって、子どもたちの気づき、驚き、達成感、戸惑いなどの様々な反応を直に感じ取ることができ、幼児や児童を観察する力と対応する力を養うことができます。さて、当学部も来年度は創設10周年の節目を迎えます。併せて当企画も来年は10周年となります。今年もリピーター親子が増えてきていることを受付担当学生から報告されており、当企画がたまプラーザ近隣住民に浸透していることが分かります。大変ありがたい実績です。しかし、2009年よりスタートした当企画も地域に存在が認められ、リピーターも増えてきた今、そろそろ新しい内容を検討する時期にさしかかってきたのかもしれません。

幼児・児童中心のプログラムだけではなく、共に来場されているお父さんお母さん向けの企画(体力維持向上プログラムや食育関連、子育て関連など)が用意されていてもよいのかもしれませんが。参加学生の多くは教職志望者ですので、実際の教育現場では子どもたちだけではなく、その保護者とも対応する場面が多くあるだけに、子どもたちの両親をターゲットにした企画があると学生たちの力にもなることが期待できます。当然、児童向けの新企画も歓迎されるでしょう。当企画の創成期は、何もなかったところから当時の学生たちが教員の支援の下、ゼロから企画を立ち上げてきました。振り返れば当時の学生たちは企画力と実行力がありました。彼らはこの経験も生かして社会で頑張っているのだと思います。9年が経過した現在、企画数が微減しています。先輩から引き継ぐ企画だけではなく、自分たちで新企画を立ち上げてもらいたいです。新しく創造する行程が学生たちの能力を向上させるはずで。毎年、状況に進んできている当企画に学部の多くの学生に関心を持ってもらって、アイデアを生かした企画を持ち込んでもらえれば、それが子どもたちの笑顔にも繋がるはずで。

## 地域社会と結び合う

教育実践総合センター副センター長 なつあき ひでふさ 夏秋 英房



地域社会と学校が結び合う場合に、実情や課題に応じてさまざまな形と内容があり得るだろう。講義では「学校教育への地域人材の活用」などという行政的な言い回しではなく、「教育は人なり」というように、校長をはじめ教職員と地域住民のパーソナルでアナログな結び付きを大事にしてこそ、地域との関係は充実できるという話をしている。学生と共に私自身も地域に関わらせて頂き、学ぶことが多々ある。たとえば、講義のなかで、学校運営協議会制度をとっている地域に根ざした小学校の実際を知るために、ある小学校を例年見学させて頂いている。また、歴代の運営協議会会長も講義にお招きしお話を頂いている。そもそもコミュニティ・スクールとして創立した小学校なので、当初は協議会が核となりPTAや地域社会と教職員が連携してみんなで学校を創ろう、「建学の精神」を実現しようという意気込みが強かった。初めてのことで模索しながら学び続け関わり続けようとする力が集約して、大変実動性の高い活発な教育活動を展開してきた。しかし今は創立して10年を

超えて、ほとんどの教員が異動し、校長・教頭も、そして子どもたちと保護者も代替わりをしてくと、これまで築いてきた仕組みや動き方を踏まえつつも、学校に関わる人々の意識と関わり方と結びつきを刷新していく必要が出てくる。地域住民による日常的な活動や学校行事をとおして子どもたちは有意義な学びを重ねている。これを継承しつつも、働き方改革の柱にもなるような多忙な教員集団にとって、地域社会との連携を図ることが大きな負担とならないように配慮した仕組みを新たに作らねばならない。さまざまな課題はあるが、やはり「子どもたちのために」という志を結び合うところで質の高い連携が成立するのだということを、学生たちは現場の生きた声と取り組みを学ばせて頂いている。「輪」をテーマにした共育フェスティバルが無事に終了した。例年にない新しい取り組みを人間開発学部のホームページに掲載されている「Weekly通信」2017.11.01号に写真入りでくわしく紹介されているのでご覧頂きたい。

## 教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。

### 教育実習

#### 単純化と教育の実践

人間開発学部准教授 じんじ つとむ  
神事 努

「科学というものは、あることをいう場合に、それがほんとうか、ほんとうでないかをいう学問である。つまり、いろいろな人が同じことを調べてみて、それがいつでも同じ結果になる場合に、「ほんとうである」といえるのである」(中谷、1958)。ほんとうかどうかを調べる場合、再現可能な現象を自然界から抜き出すことが必要となります。自然界で起こる事象は非常に複雑ですから、多くの場合、自然現象を単純化(モデル化)して扱うことになります。

私はバイオメカニクスという学問を教えています。簡単に言うと、運動が上手になるためにはどうしたらよいのか、そのメカニズムを明らかにしていく学問です。人間の動きも非常に複雑です。身体を一つの点で表したり(質点モデル)、前腕や上腕、下腿や大腿などの身体部分を剛体とみなす(剛体リンクモデル)などして、身体の運動を単純化して分析します。

科学の取り組みでは不可欠なこの単純化ですが、運動指導の実践とあまり相性が良くありません。私が初めて教育実習生の訪問指導へ行ったときのことで。そのときの授業はマット運動。私が約20年前に教育実習生としてマット運動を指導したときのことを思い出しました。そして、「今、自分が教育実習生だったらどういう言葉かけをするか」と想像しながら授業を見学していました。あのときの私に比べたら知識はついたはずなのです。しかし、これがなかなか難しい。生徒の中には、身長が非常に高い子や、極端に身体が硬い子もいます。このように、身体組成や特性は生徒によっても異なりますし、体調や環境などは時々刻々と変化していきます。実際の指導の現場において、単純化できないことのほうが多いということを痛感しました。

「ほんとうのこと」を指導の現場に活かすことは、たやすいことではありません。私自身の研究や教育活動を通して、教育実践の発展に少しでも貢献していきたいと思っています。

#### 教育実習を終えて

健康体育学科 3年 どひ あきな  
土肥 秋菜

「先生!先生!」と言われることに嬉しさと責任を感じながら三週間、母校の中学校での教育実習を無事に終えることが出来ました。中学校には、大学の授業だけでは分からなかった、生の教育現場だからこそ学べることが本当に沢山ありました。その教育実習を通して、教師を志す学生として学びになったことがいくつかあります。

まず一つ目は、「生徒との関わり方」です。最初はどのようにしていけばよいのか分からず、とても戸惑いました。しかし、生徒もそう思っていることに気づかされ、積極的に自分から生徒との関わりをもたなければならぬと考えました。生徒一人一人をよく見て知ろうとすることで「信頼感」が得られることを実感することができました。それだけではなく、その中で常に客観的視点を持つことも重要であるということを生徒と関わることで発見することができました。

二つ目は、「教師は教えるプロでもあり、伝えるプロでもある」ということです。初めは教壇に立って生徒に話すことがとても苦手な不安ばかりでした。そんな私の姿を見ていた生徒たちが不安そうにしているのを見て、子どもは思っている以上に様々なことに敏感で、大人のことを常に観察していると感じました。だからこそ、教壇に立つ以上は正々堂々と生徒たちに向き合わなければなりません。さらに、ただ教えるただ伝えるのではなく言葉遣いや声の大きさなどに気を付けたり、生徒の理解力を深めるために様々な工夫をしたりしなければならぬことも学ぶことが出来ました。教師は、教えるプロと同時に伝えるプロでもあることを常に考えさせられました。

教育実習は短期間ですが、その間にも生徒の変化や成長する姿を見ることが出来ました。たった三週間で子どもは変化していくのでその子どもたちを指導する教師の影響はとても大きいものであるとともに、その職責の重大さも感じました。改めて生徒の人間形成の発達に重要な時期に関わりたい、教師になりたいという自分の気持ちも再確認することができた教育実習でした。

## 教育実践総合センター夏季教育講座

8月5日(土)音楽教育実践フォーラムを行いました

## 音楽科における今日的課題 ～「鑑賞」「音楽づくり」「我が国の音楽」の指導の充実に向けて～

たかやま まこと  
人間開発学部教授 高山 真琴

去る8月5日、第9回目を迎える教育実践総合センター主催夏季教育講座・國學院大學音楽教育実践フォーラムが、「音楽科における今日的課題 ～「鑑賞」「音楽づくり」「我が国の音楽」の指導の充実に向けて～」をテーマに開催されました。

「音楽の学びは音楽を以って」をモットーに、学生のリコーダー二重奏による「夏の思い出」、参加者全員による「あおいそらにえをかこう」の斉唱でフォーラムは開講しました。文部科学省初等中等教育局教育課教科調査官・津田正之先生より、中央教育審議会の答申や学習指導要領実施状況調査から浮き彫りとなった音楽科の今日的課題、及びそれらを踏まえて改訂となった学習指導要領の内容についてご講演を戴いたのち、参加者は3つの分科会に分かれてワークショップを体験しました。

第一分科会では、筑波大学附属小学校教諭・高倉弘光先生による「どの先生もできる！どの子どもも楽しめる！音楽づくりの授業の実践～鑑賞とつなげて題材を組む～」をテーマに、からだで感じ表現する音楽づくりの実践が行われました。

第二分科会では、本学部子ども支援学科教授・筒石賢昭先生による「我が国の音楽の魅力を発見しよう～わらべ歌・民謡から始める音楽教育(尺八を使って)～」をテーマに、国際化の進む社会に日本人としてのアイデンティティ

を保持していくことの大切さについての講話と尺八指南が行われました。第三分科会では、横浜市立さわの里小学校校長・後藤俊哉先生による「心から楽しめる・身につく音楽教育を目指して～「できた」「わかった」があふれる音楽との出会いを目指して～」をテーマに、授業実践の映像を題材に、指導要領を読み込みながら「鑑賞の授業を通してどういう子どもを育てたいか」について示唆に富んだ講話がありました。分科会のあとでのシンポジウムでは、津田先生、高倉先生、後藤先生、筒石先生にそれぞれのお立場から「どのような視点を持って音楽科の指導を行うべきか」についてお話し戴きました。最後の音楽体験アワーでは、後藤先生と高倉先生による「指導のねらいを持った音楽遊び」を楽しみ、「カントリーロード」と「ありがとうの花」を参加者全員で歌いフォーラムは終了しました。

改訂学習指導要領では、「生きる力」を育みつつ、子どもたちが未来社会を切り開いていくための、資質・能力を確実に育成するため、教科教育を通して「何ができるようになるか」の具体が各教科とも詳細に示されています。子どもたちの音楽に対する知的理解と感性的理解を引き出すとともに、たくさんの「できた」「わかった」を子どもたちにもたらすことのできる音楽の授業づくりに、このフォーラムが貢献できれば幸いです。



## 共育フェスティバル

地域の子どもたちとのかわりから学んでいます

平成29年10月29日(日)、人間開発学部第9回「共育フェスティバル」を開催しました。「共育フェスティバル」は「学び」と「遊び」を通じて地域と共に育つ「共育」に向けた取り組みとして地域との連携の充実を目的としています。今年度は「輪～つながる輪 広がる輪 みんなの輪」をテーマに学生企画委員の協力のもと初等教育学科、健康体育学科、子ども支援学科の日頃の活動や学びの成果を生かした特色ある17の企画がフェスティバルを盛り上げました。当日は、台風の影響による雨にもかかわらず、1200名を超える地域のご家族を中心とした皆様にご参加いただき、どの企画も多くの参加者でにぎわっていました。学生たちにとって子どもたちとの関わりや交流を通して、実践的に学ぶよい機会となりました。



## なしかちゃんひろば

11月9日木曜日青葉区青葉スポーツセンター体育館にて青葉区内の公立保育園が主催する子育て支援のイベント「なしかちゃんひろば」に子ども支援学科の4年生が参加しました。先生方と一緒にスタッフとして遊び・絵本のコーナー、受付やベビーカー置き場の整備などを担当しました。子育て支援を実際に体験でき、学ぶことも多かったと思います。なしかちゃんの着ぐるみを着て登場したことも貴重な体験となったようです。今後も微力ではありますが、地域の子育て支援を支える一員になればと思います。  
\*なしかちゃんは青葉区のシンボルキャラクターです。

